明星抄

空蟬

夕顔

三

潁西藩所有圖書

帝國文庫

青谿書屋

宇輝

歌を以て奇とするゆゑんは
事海海花なるよりんくしあるまけまこと
第東乃歌ごとなるまゝ世ちんを
ものゝ人ゝ思して並乃事史紀の中紀
乃所より列伝なるとして有るに用しうる
歌ごとう

神ゝ事乃始

中川乃ゆるまゝとゝ海
日ゝ乃ゝ乃事ゝ事ゝ
家ゝゝゝ人ゝ
乃ゝ

源氏の始るを以て称し

涼をさへ流して　　小宰之
ふりよのひさるも　　小宰のあつまさまよ
空蝉乃てさぐりのきわひよふく泪哉
ひろはるゝとも
まいのやしきのも　　藤乃屋うりも子
きみゑうめもわきとらく纏(テニ)頭(ハナ)や
女もたすらくすきしは　　空蝉もおかし
めしうりて賜る給もたすきさくのやささ
ききがりよゑふ秋のま
盛りく浮世ありて　　空蝉乃ふなら
さ流くりよゑふふや

しゐらくいとおかしき　　わざや浮世出ゐ
ふかく空蝉のさめよるゝ面目にとおふ
秋のま又涙せしのこころ乃ありさんかんも身毎
あさきたる里とにくくてまり歌舞の浮世
たすくてきそんとおふ給ひよとから
よるき給りまく　　かくて絶(タエ)果(ハテ)すんとお
〈せき文依(サテ)もおひせ秋の浮世ざるとし
小宰よのいと　　小宰紙敷之絶之
かく歌くはまくも　　まづかりしすずり
めしやのりかきのたせこ浮世つとおもひく
小宰のゑめづりる〈背堂外帰中や

きのうちの山よ　あかつきもあるらんや

ゆうさ打とおりふたたるま　源氏乃勇之

こうるもおさうれさる紙　小こんぐ入さ

ぐるもいわるもと　小こんぐ入さ

ぐるもいわるもと　あらいこんもとうもと

ゆうさ紙ら変ら　ときべ者あるを

おうそうあれさよ　小こんぐ云や

あしの浦まの　伊ちかのむとあ彩猪

乃義や京極乃

よあるもてとめるや

小こんぐ入さるま

あさ海ら　峰今源ら入さ乃

よるもとぐうひて　あ乃ま入さ

りや乃中程　こまこうけせこまる

ちかやの　光る乃流て波ら

ゆようあしん　ひとへぐこ乃よ

なもとと云流あ　まどもこぐ波ら

よさぐうにかんこ　ゆるあこ

かはをとかさうむう　京極乃勇之

ゆうさ祈や

よつさ　碁を打よるまあらいな

知べ肯紙を終経より引つゞき月とし
添ゆしぬさ侍る
今ひとつまハ　影もの蘇るにけ出かり
よりかん後ほどにあむさきするにはよき
折つま形くみなと紙をまきぬへし
姉とあひの　二都をてもいともむし
同し事を済つ死かち紙死二ちとりそ
むる文あり
ちうるくする　河海より傍(ハウ)彫(ジ)をて死
危まちて徳とや、ゆきかつ志て後とり
尓なるんとこて総まとも傍側杉冝

我等傍(バウ)若(ジャク)無(ブ)人(ジン)のなする人責勝おちぐり
おあちさるなちるへし
そて絡り　まとしぬうこしやとりや
さ○つま○○　さがりさるさ流之表のふり
り同んり
経ちきつる　めしなれちさとし
むへしうおやの　おやおどろく一派丁寸絵
むまとめとこうおりつめとかり
志け形るき紙　人をかんご流よりの男
ゑこしとうしおやけ人をおうらう形る
まるてるもおげくしと志てつる紙そ

へくめさき寺へ人の性のなきへなつま
うとまるさいのいるさいはり　（うぐいすさや
うぐいすたち死へ色も性がうさとと
きちさとわらう　清く涼や
おくの人　京都へ産業乃おくまる数
為一花蕚の業有ノ不業
ちりまうめ　地と物との二や物ハ
物石なやさ云ふ
いくこのこひい
ちちのてわく
さ海へ

物さ死蕚乃朔へ
源氏乃名物へる不業

いまうゆもさ
又今文の伊ふ
ふ朔へ雑芸乃ふ
さふ
ちやまふ
たふも
ふあふへふく
月ふされふる
ひふひぶふ
ふふ云へふ
ふれふもふ

数物ふふ
又ふ人下ふふる業ふ沙合
ふ物ふふ
ふふ　ふふ乃業
ふる物ふふふ死ふ
京都のふさ海へ
ふふ清へ
ふふ乃ふふ
ふふ乃ふ

かゝかりし歌　　新ぞう萩之こゝろ

この酒さまてある人

その空桜はちりし酒さりけるを

いひし歌は　　空桜なれかちりかゝり

かれまよのまゝ元ゝ遊しとげしつ下絵

よしあらく絲こゆるゝを見人乃こゝ

角まり

ふるくて志く　　色よりハ新造の萩絲

云北のを

かんのふ垣ら乃人をゝ　　源氏りよかんて志らく

ふ人まて大絲引ぶりひさる絲乃こゝみ

絲へつまかやうりは折しもきくわこ哉

人をうひまのこし絲ハ事をてあすさか

どりよ今はかる稚を跡らしくこのゝ

小紫いそくる　　小紫かまくる宿をこ乃

さしまつがちこのさ絲之

まる夜の戸くら　　萩からも出戸ぼり

花絲ゝ角りよしそ小紫はみしのゝ

いとうしきあすしと　　小紫がなき

まいあすゑん絲く　　小紫乃顔之新だ

乃萩乃ある絲云や

また今ゝ秋りや　　源氏顔之

[illegible]　小式部の内侍
[illegible]　源氏の物語
おもかげをたにもとどめぬ女房達の
[illegible]
[illegible]　源の朝臣
[illegible]
[illegible]　源の朝臣
[illegible]
[illegible]　源の小式部の内侍
[illegible]
[illegible]　小式部の内侍

源の朝臣
[illegible]
[illegible]
[illegible]　小式部の内侍
[illegible]
[illegible]　引手
[illegible]　屏風（ビヤウブ）
[illegible]
[illegible]　小式部の内侍
[illegible]
[illegible]　いふとおぼ
[illegible]
[illegible]　源の[illegible]

[illegible]

やうらめしうもあるかな　源の優（ユウ）よりまめ
うしくんだりあるとまるさぬいい
ちぎりてさとしとく
かなさしう　京殿の人は程の源氏
のうちうちうんぬいかなくといふべども
人さきだんたまでうしぬ
まるうらぬこのめも　まるかうめひらい
おがめよりうさまうちうのめも
ひとまうらまもうひとの殺せへつま河
海よりんうしめりぬいふとさしうま

なるまま　新もうの義
うちうんぬうちうちうん
うあをうひの　源の頭をうひの
かの頭とうちをうちうる
京殿や
うまううんぬいひうく　京殿一人と源の
ぬやや
めうまうをうひもいい　京殿まうちうま
めうくまうんぬうまうど　列の人といふ（オボ）
しもうちうぬうる
おの頭しもうひ　京殿のうもめまう
かをぬ和殿めうる

いふべきことにて　空蝉はようつりうるを
やうしみかうつしはらく　空蝉はうあ
らさるゝ事からんさごめはん
人ぬへと　人ぬぐへのやうよかきう
せはかなん
かいの人を　光源氏もとしとこまかく
かるゝふすくは今人ぐぬへの指ぬして
空蝉もと指てもえ為あつどからへつゝて
とこゞものしかるべきかなん
このおもしろきは　碁打し時に
はしさ歯すぶかくうきておかすし

まはきされん　草まくら現や
やうし目さめて　軒はの荻のさ歯
あへかのもせひさりもいさど　ゆるぐ世紀知
ぬ人のさ歯りいかべくるをもはしきどみ
えさるを
みとをもしせしと　源氏の俳句なり
いかとみせむしてようる人さ紙軒も
の荻は空蝉はよんさしのかるりしくれ
ちすきゆ紙知せん為よ軒し指し空
蝉のあの派ゆまれゆましき衣をも
石なや

あるつき　空蝉之
しるひく乃浦まちたへ　夜くの浦かた(カタ)
違(タガヘ)も新たら萩への浦かぎしらぬらし
於所々ま
しるしん人の　世ともまれさる人くの源
かくの於於もさかりくかのじ勢とた
どるま新へとあなせとし
おもしとかまけまと　新また萩と源
の忌於よしすり
於くのくまこさたく人　空蝉之
かやよく〳〵　とんもくくまもとま

於まちの之　新また萩乃うら之
せん人の於らぬすく　源乃萩よ
人志るまじる事しるまじも
乃於桐之　源乃君乃たち多
君ちしらぬらしも
君ともせぬやさうり
見さる人く人くも　おやおどもしまま
うちゆるされし於ちまやさこ之
まきまて人のらぬ於へし
人乃ちひ於らん　新また乃萩の桐や
まらく人よ新せい　源乃桐之

はちハさえし上人　小町か事ハ
そのあときえし　定輝乃ちなみさく
しいまへくらしきる之
うし後めてう出侍　仏よりけくいは
きるさ侍すり
まうりしくて　小町かこゝ深紅染し
まゝのまゝ出る由へなりまし
さうしかりまく　さしくらかりまて也
いとまゝくて　小町か心こ
あくさと　くらりしともしざふく答(コタフ)
能ありまし

又おかさなるハ　此女乃たゝぬうてとつひ
てゝ又民部(ミンブ)乃ねもとやく寺門(ジモン)答(タフ)
さるゝ死ぬなりかり将乃おりとくわ
つまかのうりりまや
しめけるさん人の　とけるえとて人
よ先(ツチ)よりらりるさん
こま紅侍る中く　小町か民部の打も
とけ侍まてからまくしとも
いまさく今　此民部のおりゆゝのせい稚よ
しめくとてり小町の被寄てさしとる打
きこま花人をそのいふおちり

まくらのくらよ　　源の三隠（カクレ）るゝ
山おりかへさしらて　　源と民マの杉
もつくむくかやくよいて
い人もさくく　　山女い人へもこさんでかふ
ちらくかがらいくくとりかくく恋
いぬるゝ
かくらして　　源乃山を花り出あへ
根く耿あらさ　　芸よ子堤
いとおしらて　　小篁か志
此きく海くらめくミ　　源乃羽まら
いよの介よなとらきる　　源乃千鶴乃

こ得るの介よるくなとしやまきるゝと
あるまはるこくらな　　さきぐれ子むか
おもむ福し
ほこいらくめくれく　　宮嶋乃浦しさ
梅しゆへ小笠原も今かも云（アヒ）とひく
はまりしさやまゝ
宮嶋乃男をとへてきる　　宮嶋は蝉
ろりかきを飛いうて又万葉集中大兄（ナカノオホエ）
三山（ミツヤマ）争ふよ虚蝉（ウツセミ）も（モ）嬬（ツマ）を（ヲ）相（アヒ）挌（ウツ）良（ラ）思（シ）吉（キ）
とあるはもかきよめるひとつさへて
こ時は勝りしかそへらるゝとらて世称

ゆくこころ引いまとゝ　　おもひ敢なう
うゑんもいうおもうんと　　新しき義
人うよおもめる　　人まつ
とゝさまゝつゝても　　やうの事わ
もるあう海さゝ　　ゝうもとべさゝうゝの
源もうへいまゝゝ　　おもんおんおうゝ
おゞゝめゝ打とゝ　　ゝべゝもゝ解の
いさあさびゝもゝ　　ゝるや
ひゝうゝさん　　おもうゝん源と解
ゝ紙おもとゝ　　ゝん
世をのあさの

たづゝやいをの

あさのあまゝ　　新しき義のゝ
おもゝのあまゝゝう
ひおもゝて源の
世ゝまさゝ
あさゝゝと　　あさみ花
ゝまゝさん
あまゝゝ
やゝ解のゝ
ゝまゝゝ
あゝゝゝ
くいとゝ

なみの上に浮寝をとこ
をとこ姿の狂はしく
伊勢集の歌
さまを作るも

歌

巻の六の歌并詞をもつて名付とする
源氏十六巻の内十月まつぐの
夕月夜の巻や
六条御息所和の事
もつぐめく書出せり文義なり保明親王
の母を荒れたる保明親王
思ひくの心うきをもつ皆悉
魂なれどうるさび過ぎて和かなるあり
和とは貞観の女御の出家和や
六歳のあのと　源氏の乳母推古天皇の歌や

めのとの敷のうへに乳
母のうへ親をうこと二人かとこの男をうること二人
ほかの人数
此車いる人数門い
大門とかきしるし
ものとみ　下つかたに板ぶきにて上は簾
ひごくらいなる物ゆゑ番ばんくるまり。
車ふもとにたちそどの車よりうへ簾にて
うへ方の所にて二つの物のうちに
ちさきかとみくるまは指遣雑(コシウイ)一つ用
めくらけるに歌ちくしきよせたるとも
ちくらけるを男ちうんなどいひ入を

それも殿人第
ものうへにいひおろし用ちかの人
といふ物をさ
あれちよりあのうへ　中敷のうへ
ちうまんゆうに指よりあるさ人とうん
たちうに二階(カイ)指のうへ
さうをもをおいて　あひおろし指
門をたてうのうへ物ある　をりて用る
物

いかにとうさうして　世のなかいかばかりさして
ものうへうんゆうとあるなどで物と見ひろ

むら雀（ウヅラ）　なせんよりおのづからなる八重
葛（ムグラ）さへらんかぎりなく繁れる葉に源氏つ
ひもむら雀よりは程なくひとしくなりぬる
ぬ程なくなりて新枕や
源氏　その秘事とも
さらしなりけり
さくらもさるものやきくやといふ
るまでとて今も四季の襲（シュウジ）の
産の初めとなりぬるまでとめ
ぬるまでとなりぬる
をのまに
ひとりぬるとしふかぬ
ふるまでとなりぬるよび死

ひとりとりふしちまでなりぬるとしふる
ゆとしてなほのはづきの蠶（カイコ）ふるまの
ふるまでなりぬ
をしらぬ人よ
をしてさもなるものつきく
梅花を見るにつけ
よ　さくらの花よりも今ぞ（シンコキン）ふる
知るべかりけるまでなほ人よ事ゆくまで（ラチカタ）
ゆくまの死ぬ義のこの分死ぬ
夕顔分でさもなるの
よりの家よりも梅さるものなる
人めさくく
ねといふよりつくしまでいかに人くまでなる
やまるものや

このもうのもと　はまぢやめらうとちや

はくぢそのあるぐるくへうしと　朱　二条流物

四後嵯峨院御時

びこりのもと可ゆるきうくへうしと

ひひくくしくしぬ

ときくふるおすすめるくへ

このもとのあけるる門より　ようへよりひかう

門ふきとりやうしかりをしめけるを

いひしるかり

ふれるるをりとくらう

らどゆづきまどくしくしるさゆるう

いくとうくしある　流こめまこれかとど

ふれかのあるとのよりこどうとるかりくへ

門のもくく推之門のかりの　はまぢかのかれ

をまりのさんふくとべくるるをとうくとふ

雲くへ推之門とめをくさいうくるして

まうまるかりやうの書ざ海くるもいくまま

あんかるるりや

かくるるをくくとけ　推之の縁

ひくくいまくく

ぢや

推之のあるよりあるくるる　源氏の車引入くかり

山里人大蔵のる

ちり落ぶどひるる前しも源氏物語
出給ふ

おしを明るさ　めるひとの親や　さ海ぬうへ
あるうへ浜ぬよさうひ
うる分ましうる海の浜あるるをみどり
ひるくとさいるを作ふ海さうの色
ちぐうるるる人物とやあるひしとと
いひしとのるるるよ　戒（サイカイ）の物　戒
とあるるるる
月法をるるるる
うる色ぬるるる

源の親や
さ海ぬうへ色ぬ

事なるる
義なるて物位なるる　菩薩（ショウジン）をもど
とるるるあ物人物素とるんのへとや
さてるるるるのるるるる　九品（ホン）より品
上生や今るるあ浜後佛の浜えるるん
清（キヨ）くるるひしあ菩より物（ドク）の親
かう海なるぬふ　うる海い親や頑愚（ジング）
るんるるる海のるる清（スミ）く
頑海ぬ海おるるるるるるるるるん
るるるるるるるるるるるるるる
とるるるるるるるるるるるるる

わさのしるしの御ぬの　ゆのはい正祈りの
うるはしき美女にぬいのもの乳母をもとめて
大切のおひとりくまのみるとのおもとに
ゆきたいとかんてうのこと　居りまるうち
と腹痛をなしてゆるすとてゆるたいとこと
ちつや
ひとりしひのそこ　ひそむい聲(ヒン)をもし聲
ち肩鬢(ビンビル)やひのそこうを見とはうこと
いうをまうるまきちる物よ　涙の親と
業りしく文衣の親(パイ)衣業りしく祝(ノボ)ぬよ
ちうまこ物や

もうしんはうまうし　乳母
をうこうまき未摘をうんこあり乳
母衣(イン)(ジュ)数の事ちへの花ちんこうら
ちうしく　大郎乳母をだ中よりみる
ちいたとん　居ちゑもとうしと　和よりとんぐ
ちうしとちうこ涙ひはうまこ
みぎよりちうるう
涙ちとく　祈(イリ)どちづめうこ
ちうこめて　さうよりの山扇ちゑ屋ぐく
腰ちんどうべうゑ分ちめまこだ山乳母と四ちう

[illegible]

てはとうとうひとくもの海はとて月

はふかぐひ筑紫や朱地張をどし[illegible]

ちよ日と言よろれどもかつて

ふめくらよ　ふめくらよとうとうとうとうとく

みとるつ源氏ものがたりとうとうとく推

しめるよりとうとうとく海とうとう推

とるつさいつとうやうとうとうども折

梅のつうがくして出しる筋をうへ

光るよりの教ものの女の子よりあとへく

後るとうとうとく[illegible]と言へく作り海

海よりの興を義人のよりとうとうる事光

るよりの筋しるめりて義理うなといふ清

とうとく後うと

源の四郎

はいめ形るあい

きいのうとうと　ウケイス二四郎　推ちんぐうとうとつる

しくらへども形つる

こうの文六日　推ちんやめくくと推ち事

ゆうつる

ふうとうとう　源氏ものの親

御ものいのうとをきるくんの　養ものの親

はあ張の中大るものの一やとい養つる

めをん　　揚名（ヤウメイ）の介の妻（メ）や

ゑぢうへ入りて　　ゑぢうへ来かりゝよりゑぢ

とるちんどりうるや

ちらうはいて

かやうの人ゑぢ人をど

のあるとゞはいて　　くうやうの事をとゝ後出

しあるるちんとおぼとるつ法命と

ゑ人とんてあめり

さしてゆえんはんのみくうした　　うう

よこのをとゝあしせるいさるさる事

るるれも深うりみくうとん後

ばうくよろ　　ぬるゑの事をちとうろく

ゝう紙よりのと書

ばあるうあくよ

ゐ親書紙ひきう後撰

ゆれよ伊勢へさうるまきる人とくいちんと

ゝりとるるとうさて撰のでうどれと

うとるうあうしあうごうよ書てと

らるるゝくふとうろ紙や

ひうぬさうに書うへく　　ゑと書うへ後

ばうあ用ふうくさゝあるのゆよ梅木ゑ

ゑ乃書ゞ後不ゝ巻中深乃後ばはゝや

うてくう　　ばゑ文字おうまくくうと

さなきめりとてしも雨夜のしなさだめてしかり
ありちつゞきてとゝへ旅まして見ると
いふおもひのまゝに道をかよりて人よめりけの
ひめくりよりて　一つかひもやしるかやいへつり
答てもまてこしうとよめるがそれかゝ
ぞみ物とゝめしうりよ力んとてしへる給ら
てしうしといひまてくしくるてきまとも志
数へたれとあり
ゆうしりんぬ
　翁がく深とて志るうかれ
たゞこさくびさびしとてちやとさしるゝる給
よきゆきしうた折花の志さきよせと

みさぐさびしと志けりの秋り
いつへ帰りて　翁で須磨のもすそも絵書ゑ
風流(フウリウ)はおもひしりぬ又かやうの態がましま
須磨よりまそて又いつかふかなと詠むや
いさかくめりしかれども　さかくいかさとのやう
は須磨の乃ひるや
めさかりしと　又須磨のあとゝへ旅のは
てもすさと古く須磨男ふるひし
てうち悪く海ら家あるや
須ふさしの取よれ　六条須磨居取老法
取や　ひさへきてうさ行之　朱　は法師枝

よ修理して六条院と号ぜらるる源の氏
和とする事ありて今こそ世にいとく昇殊ちれ
どよはひ高くて毎日ひとりんが
きのへつま
うちとをね　月をこそ源くまをうとくん
大原女ちくせん房の法皇和とする相撲の
見るとまるるかのへまとくれおまを
ぜたるよおりしまと
きくもこそ思ひこの
なるこそ思ひよ　山住薪の名ぶと
ふとあくさとくぶ

ひとりあるまくく　推考ふる毎日ふる
毎へ夫と病ちんゆへの揚急（ケダイ）や　大蔵乃乳母や
まるひ行人　推考ふる乳母や
おぼせられし後　五月ばかりと言へ
さ月のこころはひまち　みはしたるとこへ
来まる人あるまでとるの乃人へ
くおぼ推あまこまれおよ知ぐらしと
その人といさるよ　夕奥乃元の事へ
夕奥乃元の乳母とる揚名及流さのむ
さとあや
元ひとるの物　縹（ヒヒラ）や裳（モ）をと引掛（カケ）た

あはれ人たとへやゆふさ海まく同僚新
あるゆゑかんしめさ海之同執ありかさも
あつまりごさ給しけく上ばくの人ある
浅菴しおつしとおぼし背むり
明日夕日乃おちなく　思ひさむる言をと
かんしめら兩西乃あつげゆゑるべし
おぼえしり　　推之んの中よの字之金ん
ごとあるさ浮力ある事一だてもらろづくし
貴ろ々も志路ちの須形乃るめぐひろく人
もるびさやまとあるべさ給いさくらわらや
この須思ひ乃らずなさも志路かぐけとさ之

りしあん路へしかるゆりや待ゆゑ　　推之ん
須ありま
せつそこ水ゆゑ　　推之んの文を浮かりし
しめるとなり
秋のひよ事
源乃須や
乃志もらちよゆゑ　　彼岸乃衛や
させ乃らけ群の　　貞節ならつまくさく
しろ給ひて
おいしろ水しゆのしらね
宴まくかたへやらん
あるらに之だ給さるまの人まくのらへ背あな
らかに一秋乃あやゆらしまく窓とあへさ給

あまりよろづに芝居をもうけうとよんだ
ほどにつまらぬやうまでのこんぜんさひ拵
ばかりなるや

かやうにかきくどいてい　やのあるじより
も奥かるる事のあるよし彼の歌の心
よりこれかれ人々うたはるる事を
ゆめにも思ひ寄いはるめる
うらもなく物やうえんなる　初花
萩なり

ほのぼのとてうたうん　京輝の作
さ所あまたにかきたるなり

きんこの形さの　京輝の人黒くとえん
もとをかうるやうるやうの京輝のこの
乃理元

いよの介　京乃まや紙そそくとうるする
毎一来源乃あ物語やや
はんをいまてり　源氏へ京系ると
ゆきてくい　四乃西宿の清いぐらよ四変れ
ぜとも京輝の碁打し対乃をさひ
ぜのうへ乃ぐりいの乃おりくえ四のわざうる
乃あのもまるる　まべくるるかや
うよ京輝の貞芝るる紙さおくさ張か

名にのみくはするとくらべかれ我にあはれ物語は
ふ紙はく省きさすり
むさしのゝ　毎秋に女乃事あはれ也
まだ語りまじるけん
人乃母あゝれ　敵につまれは伴る乃も
がゝめよるて寐しとく東女びとく
むさきめとれ　新ゑの萩をかゝくめ吾てく
小ねよあそよろるや　朱　伴るもみ針
乃虫の縫よわりしむや
小の中とれ　蚊帳をとぢ具して小袖や
人乃心をあはせさる　蚊帳の離面さ油え　凡十年

さまゝ小路く　文字と針ゑとらを
うつさへ貴とも蚊帳はゑおりふとし
今一まゝ　新ゑの萩や
あし清くとも　人乃性のみくゝ小袖
るりん紙付へ
人心りなゝす　唯君ふしく夜釜乃衣
るり蚊帳のるりくしふばゝや
大和よれ　蓼くや
六条泊りゝ　さ油く紙はくさまてう
ど夜釜紙たひのゝ小袖りよるてきさ水ら
朱　あび朱がゝ花るりをいろくゆ姫せら

まてくまもとるつまもあまこ法と法
ふるも入てくへくさるもとさるもくさとく
よそもるまく法ふさくこひ　法長和のる
放逸など拾りよあるべらるる紙云
ぬいと拾外　六条院乃法長和をこびおぐ
ちめくるふ異りよ出べくさ法く朱秋好中
文も法せいだんくくいよくう法乃紙
とくくるるもくる長和るもくさこりの一四よ
そまりよ入くくも一ゐあくこ紙ゐくえ
じくるる事を拾おぐとあり
よりひ乃紙も　法長和るる源氏るまる八八

乃光や御巻りよ源氏二法長和井くくくく
ど源るる今十六条法長和るる十定条や
源よ八ひだるるまる乃光や
拾きめくく　前坊乃法長和まる秋
好中文を生紙ゐ拾紙る利紙事
今の源氏乃無ひ物紙くこの和ごまこ
拾る事るとおり法ぐくる紙や
いくくくのるれく　あるべらる源く
無ひ紙事るくくくた拾るといそこ法
らまくく起生紙くさ法るくくこ
中拾のおりや　法長和乃変（クヨウジョ）や

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新と紙(ダエ)とふも
[illegible]
[illegible]
[illegible]

の宮めぐりとて嘆きして云ふやとぞ云ふ
しるべは葛城の神仏化現の事役優婆塞金
峯山ゆ高嶺峯を為行者の為に於山に居住
金剛神を使役給ふ
云ふ山ゆ高嶺ゆ
高ゆ出る紙ゆ
箱の蓋ゆ車ゆ
ゆ
以中物の法力　以中物の仏の法力
ゆ
ゆ
ゆ

うまてくるもやとまてる程ぬ　　名の程や
こんてうはのふんとおぼとく
こうのとの事くてうれて　　ゆまて
地や事くぐくくく

やりとりの　　武士の文よりの分とめ給へ

言あらはさんあり　　三編の

的中の中編（エニ）くれ　　源とはいはさぐり

てさらりのもちろん

よりもいらぬ

狂言のもちあり

ふる事とびあのとりもや

あり

猶は狂言の狂言　　惟さんがまつぐ

次方のあこは民の婦とんこかもる

宗はこうの罪をもみくはもこの文より

てらくあぐみ他なる所より爵（シャク）をさして

太史とは狂言の所はかりのもそして

公事の惟さんの良法二人やけかもど

よりもの分さして公人多もや婦ども

源河（ゲモク）の中文より揚の外の中文より惟

先の法あり三人はかりより四通

あるまして　　惟さんの知ぐ通りて

まもて形ども

あれあるをか

言もこうこうもく

よりもしく為ども

河海ぐれ同事

打向ひくいさう

ひくいさうもみくぐれた

[illegible]

かるも物のうれう　しらるるとて暫時(ザンジ)せん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大やまとなる御ぶくの
人なるべきをうひをゝ
もしいとゝもひくらべ入給へる
とゝ

中くもちうやうんもちい　中くもちゞ
ぬさをとりてやうらう
こゝろくと
御ぶくの色ども　中務の君下てゝ
兵部卿宮のぐしたる御ぶくの
多侍ふして南面に
色ども色ゝなるこゝろ

あを　按系図抜
さまゝなる装束の
もとゝなる御ぶくの禅尚御ぶくなる
つまゝらゆゝしくはべれんとて
うきもうすくうすくもあるべしやせさう
ばひうせる御ぶくとゝやあれはやうく
うへの中のこゝろもくまくして　花色の指貫
十月朔日入給ふ　按系図十月朔日
やうるひきる御ぶくよりあくるあり
やうとあるうへ御ぶくよ入給へる
ふようるへつゝとゝ　按系図ものうん御

按ゆゝしくもあるして
花の禅尚御ぶくなる
御ぶくの

糠輝ちゑ（キウデン）の女乃あらをとうとうと
さうふやゆるとばいや〜成るう
てうさをくこさ行ぬ〜さるよ
ふ行ふるへし　　恋の切
中くさゆへくお海さるも
ちるあや

ゆさめ乃色　　夕泉上の衣裳（イシャウ）や
朱いぐうち花ゆさあらせのうねるよう
女のうぐふ紙さあるへ
うす女　　ゆ乃うすさるゑ朱うぐさ
そことうまうて　　夕泉乃上のさ海

ふゆさるうふ紙
めるふ紙しだうとうぐどうぐどうと
ようさ海を乃うと今ちと海さ身うと
そへ変とゑ源のうぐばうるうと朱あう
ゆさうちをさうめるうあ乃う
いうう傷ちんと　　紙とも乃ゆうせて
ゆさまう朱は性ばうもゆや
ふ迎をめ乃ゆ　　ふをうう夕泉の変女
うゆのめ乃とれるや
乃ゆ行ふさ乃　　はは志の切うをみ
ゆよ変ちうすくいるゆうぐうさと海

[illegible]

[illegible]

[illegible]

也、釈迦仏ハ三会ノ法花ヲトヽノヘ給ヒ、
未来ノ衆生ヲトヽノヘ給ヒ、
ハ、ハ、ハ、

やとりふるより　　平忠度

ゆくすゑの　　河原の院

やえむぐら　六条院の院の池　延喜

源兼昭日記日条　六条院池　池　源

[illegible]　[illegible]

[illegible]

あはれとも　　平生人とはぬゆへよりの

恋わびぬるまもあるこゝ　延喜　源兼

雁も涙ぐ霧まとさよ　　車とくさん

さ夜の西の

[illegible]　　源乃[illegible]

いはしのもとのやか　　源乃[illegible]

[illegible]

山乃[illegible]　　[illegible]

[illegible]

[illegible]

と人を申るあるとひとをいふ
なりや

源の頼朝

ゆかりなきいにしへの
くさ海へば海藻賞うとをくて義経

ゆかりの頼朝の
こゝろのさ海知やてな
業経(ノツネキヤウ)ゆかりなくして源氏をたくさてなり

ゆかりをたのみてとて
なりをあるまこと

源事なるこゝろ

ゆかりの人をさうらうるをきら

ゆかりさん

頼朝ゆかりの源
むつまし業をもをいし

ゆかりの源
の彼宿(クツ)や業よりもとをを業をの方へ
もとをう

ゆかりよ人をうまう業

源の頼

をををあの川

引の鳴(示)るの元中
川を緣(タエ)ゆをもをあるをふ事法さあ
やをいい水原新牧川をどをひる事あれども
沖中川を緣(タエ)る事ををさよりをを
鳴をを異(チキ)をぐをあをる花よ鳴る
の沖沖海とはぐ法義(ヲキナ)の法抵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

義宗の親子三人
討死の事
今度の合戦の数多くたたかひ
さかりの時分
浦々せとと　浦いよいよ
はしりくるふ事しかへと
あさましかりける事
なかの浦より世にすぐれたる
ぶめどころ
あいさつ
ようこそ

あやつりさかな
あやつりの事
不審なる事と

花の
あさましかりける事
親妙や
うちうちうちうち
うちの御ようの
ものや松ばの抵抗奥谷
おうしさま　推元
うちうちうちうち
うさ海の御うへ
ゑ
うちうちうちうち
うちうちうちうち

れんげ
ものしてあげうしを
合戦
ものだ乃花
深ゑ
ものあまをきること

うらはいうもしとめさせ　禁中うち給
給へ者すしやう　六条源黄門
いとおしうさもうらか
事なるまま
給へもなく　ゆくへ奥乃とのあまうう
おなじきをうるとも源黄門乃北方
しをゆび給へ後と源乃ふうへ給へ
うやうう給後をうへ奥も無どうる
や
すうう称へ給へる
源黄門乃合なる歌

ゝ物なる事なる死を　夕奥とうへこと給
乃むとめやをうを姓さしもなうう給へ
ゝ物なるうなうとうへつまゝ八源黄
和乃うまゝ者給へ給へくいのうび
うてゝうう給ううさうへよう
源黄和称へくゝ給なうへし
給へ乃人を　夕奥乃とや
ゝうう夜なる　源乃ふをうの給へ
ゆうてうまうん　ふをう羽形なる
この女ふいうう　夕奥とや
ふゝうう給へ　死
ふゝうう給へうて　ふゝうう給へあまうう

あらの宮ゐこまく　義ぐのもの仮とも
ひんくぶこゆ　ゆまごども　あうもさぶ事
ひまぶ　ぐさう
あをらとうの仮く　年生ものをぐ紙
しをよ　ちをんをゆ仮ものを
ひうもを紙ひ　海よ病ちんひをを
うるうを花おひ　ゆやとうく・いうく今夕奥
上病ちんよう　あらさぐ　あぐうを及ひんうを奥
刻ものひ海仮ものを　とと源ひ仮ひ
とひ流のあひうを　今奥さうをひうる
ちんをゆぶ院ひ紙ひうをとうを紙う

おひいあうもをうく海ふさつる
をぐいひしうの仮ものを
みうへうをうは　海よのつひうをうを仕
あのうをうをう　とうををくあつをくをゆや
とうくあ仮ものあぐ男童をうを人資歌
きいひ海ひ　夕奥ひ花ひて系し
ぐいをんや
ひあゆうしといふく　文選五十六新
漏刻銘曰衛宗載傳峰之節
衛宗漏刻候日奥漏記云沖云條門侍
五御发也等仮御出門岸撃木粉傳

吟備決

うちをおぼしめしてはいたとりしてう
ばりうるるべしばるるよ禁中の事ばかり
おぼしめしやすまへよ内てうふりとの
させおはしんといぶくるあるんとおぼ
めしてとあらばんようまかやうの事よ
ばまてくもれ御ばりおへいはん巻のふ紙ぞ
きおはいざうん

ゑうこいめんうくとうあうん　滝口（キノ子）のう
井やしゝ女房ようつくんくうれ
実乃刻ようくぞうんとおはへ延喜色

御式（エキ）凡物所ちん内裏官人一人近衛
一人　起寅一刻　延巳四刻
但右起丑一刻　延寅四刻

えまいりて
してうさいうざうるうれや
おうへうよう
まへとゝや
あるよ事うるあるる
物りてさいまとて
て実とさいう
とおうるうや
芳あるうる

滝口うる源をそん
ばりてまうれ

分入ても恐怖（ケウフ）する
大若分入をもとめ果てしなき
乃事をいふおとおしき
法師をとゝ
めとる夕海よりかんこゝ
あつる　ゆづりもとうばく親
をうひ　人より縁（コシハク）ゑ
絶らるゝ法華ゆ
出てゝ
ちをとゝ
分入をそ
ゝ

分入
海よりかんこゝ
滝にや
雅（ライト）ゑんぐわんや
南殿乃巻の
はおとゝをめして
るにゝ乃あるゝ
ゝ乃元
大歳乃乳母や
あのゝふ　かやゝ
とまゝ
とるゝ
むゝ
をゝ
海乃原乃あるゝ
海乃
いづせゝ
人めまぎれ

やうなるをへて白氏文集第一の巻の
詩に象の鳴る松樓の桂枝に桂子の花を
為り将相の位を為り公卿に蘭の芳
なるへつる

こうこうこうこうこう　くさかうくき
ゆうまはのうくまてくあるやうゆうかう
はをりそはくとくちんふんちかること
はえとくさかうるんと　はえをはう
ゆかや
あつさうさめね　はえゆう
おはをるくあるより　芙蓉うん

うけはをををはくはをををはくはをむこひ
うはをえんとと
肉よきこうめうんを　肉よやうえんを
ちづめをしてをえんをあるまで
はえとるまを
和中燒　今和しも　はえ蓮ちゆうす
はをるを
ちをををはをはをはをはをよ　ちづえん
ちはえうをはをはをはをは

夢ぐ[ミ]の[ヲ]ぐ[テ]物[ヲ]ぐ[テ]ら[ラ]ば[バ]ひ[ヒ]ま[マ]ま[マ]ひ[ヒ]ま[マ]ま[マ]ま[マ

源氏の組
山橋家を
連枝(レンシ)の中君
中将殿を入給ひ

源氏の組
山橋家を
連枝(レンシ)の中君
中将殿を入給ひ

源氏の組
山橋家を
連枝(レンシ)の中君
中将殿を入給ひ

源氏の組
山橋家を
連枝(レンシ)の中君
中将殿を入給ひ

さてのちさるべきことを
あらせまほしき　以中将の子細
の仰せ
ひとへに申せ　海づら
もしほ流すまで
ぎょうの紙に
たびのふるまひ
くこさうに　かのやうよこ海うみるく先
大まよひ中をやまこ
義人乃弁　以中将の事
まひの事を
しるすまで
大変をとりも
いさをかしさるまよ
ものくとこりまで
もいりとて明日
なるまで
そひあるまるる
けさそ
ひとと海云
よあるまは
るあ海

蓼上乃弁
雅光

おもをいとこ四の
月をまるぐんこ海ど
云る新山乃景
集之
奥山乃
乃弁

まつのうへにさらでも海さかこう浪
くだけてのみとしもあまたこだかるものとうきう
ことうおりしかくや　光を燃乃あま
まつよりかぜよりかぜともなるぎんのうんこうく
うちあの人　たんをうち投なげつひう
をはぎやらんとうもや
あもいとうにたちやう
るたうさうよ　源
さうへ者よこう　惟光うちや
うもまつる事うも　不思とうんこう事も
さめうくうん　うへ者とかぐ

源乃親
さうこう　うもまつる事とう
さうれうひるせと
たちるせどもとうう
ゆゆの命婦　惟光うのうこう
さうへ法師　さうへうんこう事とう
せうぐいうれうへ後ものとうくう
しうめうこうより　うてをかうう後うや
角うさとう
うつまを行へる
かのうくう女房
房や

惟光乃母
二条院うり伺候乃女

[illegible]

雖[illegible]

[illegible]

[illegible]

このあさ夷のうぶ衣る　雅之助　文乃

乳母うやまれよ　菊よ　雅之助　女だうの

尼ぜ　ぶ　伯耆山乃　ものいひ

右を　屏風　ひな乃ごとく　屏風色

ぶて　ぶて　ぶて

おうて　ぶて　青けも　ひな乃ごの

さ酒ん

先ところ　ひな乃を

雅と　ひ　ひな乃ごと　ひな乃ごを

ぶうや　源乃大切　右を

ぶいる人　右を

さるん　世中　ある　源乃右を

ぶるぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

らるゝ河のほとりの柳を
源のあつまさだ
あるまきの井の水をいて
さくらをしたゝめてまつ人
ひとりぬる
かゝる河の水の流れ　光源
鶴の御使の宿も時雨の
さくらをしたゝめてまつ人
二条院
ゆきまつさがの松たち
ゆきまつ
つゝもたゝ
さくらをしたゝめてまつ人
源のあつまさだ
あるやく非えの板橋
源も佛を念じ給へ
秋深き水のまさる紙　はつ月まつ
ちまづくつくあつまさよ
さくらをしたゝめてまつ人
源のあつまさだ
さくらをしたゝめてまつ人
おもかるまつ
これをかくらも
きくらも
源のあつまさだ
分んともたる源氏物語
めいてさくらをしたゝめ

出ぬと

梅のいとゝ盛り

服衣の文添ふ

流れ水の不二の東の方朱花流れ

肥ゆ久方の雲の

同じ河流れて絶とあるは義也や

めやゝゝゝゝゝゝゝ

の盛りや

年ふるあれば

春ぞ

盛りもすゝみ色ひろ

らへがたしとゝ遠ゝ

添ふ

添ふ

夕無上ゝ別

いとかゝゝゝゝゝゝて

内ゝ

ゝゝ

ゝゝ

ゝ

よとぐめ亟ものこと

九月九日　年金ゆえ

たをれめ出く　家ものこと二条院

ものこと事や

いとるんめやしき　源乃朝臣

深よめ月ひろるもた　前ものこと

しやたれくしるれ云

ものてうゆく　たをれ朝臣

ものめるとめやしき　源乃あひて

めれ事ものひけるよんひれ

れるもと

源もたれくさ乃

れるもとのこと乃そめ乃事

ものく来もとれらぬ事ものくへく

ものたれゆへたるもと　来　れ云ひれば

ものれ源ものやさものこと

はれ乃れくものるもぬ源のりもの

えれれんとよ乃朝ものへるもものこと

ものこ源もれゆしめものらめものこと

ぐものれものこと

めいものるものもる

面れものもるものと　源朝臣　さていふこと

月人右

かぎりよりゆるさるまじ
乃事なるべ　　恵あらさ
ゆるさるべきなり　　家乃人も
ゆるさるべきなり　　一法とふうりた
ゆるさるべきなり　　乃ふうりた
ゆるさるべきなり　　あるべきなり
ゆるさるべきなり　　法乃親
ゆるさるべきなり　　妙乃教

以中物

以中物

以中物

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

年[illegible]

十九[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はこの乃結句死をもよおさんひとづくしとと
あつまどひもづくしに源氏乃病悩（ヒヤウナウ）とん
ひとせくこゝろ西行乃ながめまづくひ行ゝ
とをもくもくれんとくこゝろをあまよ
つまれるゝ式ゝびけるこゝろひみぐくこゝと
あつまを絵いもづくしひるこゝ歌
海をあまのくもくよ　神あがのうくこ
わくこゝん系ゝ系ゝ系ゝ系ゝ海と西ゝ
いきるゝひるこゝ
めつくし式　光輝乃ものもちゝと歌
しこゝあよおゝ海とこ

いきるゝひるこゝ　光輝と源文ゝ
羽や系ゝこゝ海と西乃流とゝ系ゝ
光輝のまゝるこゝいこゝまこゝ
あや
光輝のをこゝ　こゝるこゝあ
とゝひこゝ
こゝ乃系ゝよ命こゝ
行ゝのこゝ
光輝乃ゝ海ゝ山ゝ
こゝまゝ行ゝ
こゝこゝ
光輝乃ゝ海ゝ行ゝ
こゝこゝ
光輝と一句

よかけてたるまこてはおもはさるへ
うらみさはまい　行さき義
かりねの心の中　義人かりねの秋知
らんまをいとゝ
うのまゝ変も
たにうへつも　源の朝臣
ぬへる朝人よりもとくあり
かのうもも彩さ丸義　うゝとはなり
てうこはきるゆ義の夢もまくら
かやうよりおはもとゆ
こはきりとゝ義りはきて　河内

後撰たにふ雲ふ
さはるもよりく
れるらまもと
つまゝ朝
かりのるさおつと　源のあそ
よと須切ゝ心ひ　かりの丸新
ちゝ乃はちゝ　
ちまる
おりはゝる　ふもと丸義
心ひも
かりのめもと　ゆうだてとゝ源

とかのことをかひむとぶらう
とゝ云流あるもいとゝ難ゝ行ふよ
ものくるとゝ生うきとゝ云るぶ
為ゝ

てゝ書ある　ぶ八ゝ南巡礼ゝて
さうゝ義ゝ人たゝ人ゝ遊ゝ遊ゝ
えゝあるま
こうゝとゝよゝ文も　みもぶゝこうゝ
みゝ為ゝゝとゝもゝゝ為ゝとゝ
ま為ゝ
ぶ十九日　いゝゝゝ

りんさうもつせめりて　花紋

重陽の翌日の宴に十九日の紋の復古の趣

約綴まりなる水濃の松の緑に梅擬の紋

紫式部の悲嘆の人の逢の裏の日の文辭の

清和天皇の貞觀九年九月自製の紋

うつし紋文自作例えや

あちらまとおりひとの　妙なる意

なるに人なりん　文章　作者のこと

なりくるもきふる　拙し　猪

もみまこのふさ　朱生の再會の

がうれとんむと　ぶきてるるひいりん

乃老まりとく　のこの紋松とけ

ひとい解　紋乃義なるへ

この紋ゆうくい　四十九日ゆてい沖うる

よしめぐうんこ

このるてとと乃

推えをうう

あるうるで推　さうもいるね

さ海こ朱　松ひ作

り夏外乃ふた

ゆどりメ乃ふ

ちでかるまく

むうこ

自紋推えうむ

自紋の夏紋乃ふた

るうるく紋中ねうる

ゆへみるくらるる

とをるり　　揚り巻の中の書い編安

ひ新ひるてそ　　又一人をはしよ組付しあるを二人をの

がつまをぶうつ乃巻よみをそ

たをたこと人をる巻二ハ　　第よをがこと

たををを引乃めのをのる

もうをのをををを　　むうをのる

いよの分弟巻用　　おりをむををを

引して伴ら寄よ候しを

ををらををる　　を殺ろうへや

ら扇　　ほ　仲隆　　ほうへ下向の時候

中をををる扇伝法ろうを　　源し

さいい元の松る系海さるをををる乗

あををのうを分をりをを三して

あをを　　黄人帝四十余人王を最末をる

藤原元平海師を日を為弟ち藤しをる

云云道祖弟を　　故候道よる向ろる

さををいををひ義や

うのこうをを

第乃りあを巻を

あをのをのうをを　　あをのぐ

とをひうどる神ハ形る対之源り

とくばるりまつる

こゝのゝ　　ゆふ花に紅葉ちる

山賤のゆくぶりくれぬ例のゝ

しつとゝのまに山風ふきぬ

とみくるゝ

輝のまもるもうへく　　もゝけいな

のゝ名や今のゝ名のゝ名

おりへとゝのやしゝ　　源のゝ法ゝ

おりふしまをとゝへどゝいゝ朱おりへどの紅

ゝけせゝのゝ紅いひくゝもゝ歌

きゝのゝ　　ちゝゝや海ゝのゝ

文ゝの色濃てゝ

ゝゝ　　ゝゝ

ゝゝ夕月のゝ

ゝゝ十月のゝ

ゝゝ　　ゝゝ

めるゝ余情（セイ）歌ゝ

不ゝ紅分ゝ

乃中ゝ

雜（ザウ）のゝ

ゝゝ人ゝ

東ゝ一ゝ第ゝ本の桑（ホツタン）乃ゝ源氏ゝ

のゝとゝ

とさへ未乃世よりいひ伝へまさる人ぞ思ひさうのさうしちよう後へ思ひ出ひとしもいとおしくとうけう（ジツ）遊宮第一本の姫よりとゝ家よりまく源氏乃ぬるこの事ぬ乃書張ちとやそみくそちうけうさ以一流ち第一本乃發端ち結（ケツ）とる宿とかんこゝろめまかやうよりまくこ行れまく嘉源ち流ちん手かく後へ思ひのひ一　夕無乃三ぬん事ちとゝ流ち事といちろ

ちまくこ先源氏ち相養乃帝の流ちる流ぐ乃事ち計ちとゝやそえつまこてちるさが私ちるそうもゝ仕へ文章（ジツロク）の縁乃ふとうそぐへつまさまぢ乃ちまうまうちとゝちり

あまうまぬいひ

ちまうちちまうまくこ流ちん

ぬ事ちまうへしこちぬ

明夕参考四

五十三終